令和5年度　ひょうご躍動フォーラム議事要旨

１　概　要

(1)日　時:令和6年3月 26 日(火)15:00～17:30

(2)場　所:兵庫県公館大会議室

(3)参加者:齋藤知事、「躍動カフェ」「ワーケーション知事室」「地域未来フォーラム」「ひょうごフィールドパビリオン」視察などの機会を通じ、これまで知事と対談や意見交換を行った各分野で活躍している 94 名

(4)次　第:①開会
②知事挨拶(次年度施策説明等)
③グループ別意見交換(A～J グループ)
④グループ別意見発表(A～J グループ)
⑤知事総括コメント
⑥閉会

２　意見発表の内容

A　教育とこども（不登校対策と子どもの居場所づくり）

発表者：飛田敦子（進行役）

現状の課題：

- 子どもの現状は、多自然地域と都市部では差がある。特に多自然地域では、小学校・中学校と進学していく中で、進学先が少なく、小学校 40 人一クラスで、そのまま中学校までいってしまうこともある。何か学校でトラブルがあるとそのまま学校にいけなくなってしまう。都市部に比べて選択肢が非常に少ない。
- 子どもが自然の中で遊ぶ姿を最近見なくなった。
- 今、低学年の子どもたちがだんだん不登校になっていっている。(不登校の子どもに向けた)適応指導教室が普及してきているが、そもそも教室に行けない子どももいる。その前の段階の子どもも多くいる。
- 不登校自体も昔は、学校に戻ることがゴールであったが、今はそんな時代でもなく、ゴール設定がなかなかない中で、どこを目指して行くのかという問題意識がある。
- 小学校から中学校へ進学するときに、個人情報の壁も要因の一つと思うが、支援が切れてぶつ切り支援となっている。小学校で支援体制を整えても、その情報が中学校に行かない。もう一度ゼロから支援を構築しなければならないケースがあるなど、ぶつ切り支援となっている現状についても話題に上った。
- 子どもが不登校になって親が急に孤立するケースがある。親の対策も必要となっている。
- NPO など運営団体の苦労もある。団体にお金がなく継続して続けていくことも難しい。

課題解決に向けて：

- 不登校でもいいけれども、子どもたちが社会と断絶することが危ない。社会との断絶を防ぐことが重要なところ。

- ぶつ切り支援とならないよう、ソーシャルワーカーや教育委員会、学校、適応指導教室などを巻き込んで包括的な支援をしていくことができれば、不登校も解決に向かっていくのではないか。
- 子どもたちとまちとの接点を作り、まち全体で子どもたちを育てていく取組も必要。
- 公教育がそもそもインクルーシブな教育となっているのかという問いかけもあり、公教育についても、民間でできることは民間でやっていかなければと考えている。

B　仕事（多様な働き方への取組と多彩な担い手の活躍）

発表者：谷水ゆかり（進行役）

現状の課題：

- 知事挨拶の中で若者に向けた政策を強化していくという話であった。そこで、「若者」という切り口で意見交換を行った。
- 「若者」の話で、例えば、わざわざ（島内在住者でもないのに）姫路の家島の県立家島高校を選んで通学している子がいる。スキューバーダイビングの資格や船舶免許の資格が取れるという取組が魅力で、進学先として家島高校を選択して、船に乗ってわざわざ家島高校に進学する子がいるという話があった。一方で、地域の消防団には、若い人が集まらないという状況がある。（消防団の団員勧誘の）お願いをしに行ったら、お母さんやお父さんなど親に断られるという話もある。
- 若者が3年～5年で会社を辞めていく、ここではダメだと言って辞めて行く（状況もある）。

課題解決に向けて：

- そのような状況で、子どもに関わる親世代、大人たちによる若者へのサポートが特に必要だと考える。そのために、大人たちは現状からアップデートをしないといけない。自分たちが生まれ育った時代、自分達の受験の時代、自分達の教育の時代と比べ、今は世の中が大変変わってきている。親がアップデートしないといけないという話になった。
- 3年や5年で会社を辞めていくのは、ただ何も考えずに辞めていくのではなく、ちゃんと自分たちで考えて3年～5年で辞めていく選択をしている。周りの大人たちがどのように若者たちに関わっていくかということをもう一度、考える必要がある。（大人も）自らアップデートしていく、成長していくという取組を自らやっていく必要がある。
- （知事から説明のあった「若者・Z 世代応援パッケージ」など）様々な施策や取組の情報を、全県に届かせる、大人が若者に伝える仕組を作っていかなければならない。そのためには、何よりもまず、大人たちが成長して、いろいろなことを若者に繋いでいくことが重要となってくる。

C　食と農（食のブランド化と国内外への PR）

発表者：富田祐介（進行役）

現状の課題：

- 木に例えると、枝葉から根っこまであるとすると、ブランディングとは根っこを考えること。
- 根っこを考えていくと、どういった「領域」をブランド化していくのか、何をブランド化していくのか

ということを考える必要がある。「地域」のブランド化を図っていくのか、それとも「個々のプレイヤー」をブランド化していくのか。両方ある中でどっちが大事なのだろうかという話となった。

- （ブランド化に向けて）みんなで一緒にやろうとなったときに、みんなで同じ目標で、共感できる人が集まればいいけれども、そうでないと横やりが一杯飛んでくるということもある。仲間づくりに向けての課題がある。
- ブランド化にも善し悪しがある。例えば価格の問題。ブランド化した先に、何を求めるのか。神戸ビーフの話では、地元ではもうなかなか食べられないようになっている。地元の人はなかなか食べられない。地域のブランドとして売っていくのだけれど、海外の人〔インバウンド〕にしか届かない、（地元の人には）特別な日にしか届かない、ということで、地域の食ということで考えて行くと、地域が取り残されるという話もある。

課題解決に向けて：

- （一つの意見は、）広域（の地域でブランド化）をやることのメリットはある。ただし、それにはフェーズがあるのではないかという意見があった。例えば、兵庫県のブランド品種のイチゴを育てているが、あるときから作っているイチゴが全国で扱われ始め、ブランド化ができる前に全国の他のところ（地域）で有名になってしまったという話があった。一方で、黒豆とかは、地域の名前を出して全国に広がって、常に「黒豆といえば、丹波」というのが守られてきたという話があって、どちらが先でどちらがいいのか、というのもあるのかも知れないが、考えて行く上で、地域で先に（ブランド化を）確立させるというフェーズがあるのではないかという話となった。
- （ブランド化に向けて）仲間づくりはやはり、大事。（横やりはあるかもしれないが）皆が一体とならないといけないというぐらいの大きな目標とかこうなりたいというぐらいの大きな目的のようなものは共有されないと、仲間づくりは難しいし、そういったものを作って仲間作りをしていけるといい。
- （神戸ビーフの話から、）誰のためのブランド化なのか。そうした目的をはじめにきっちり考えた上で、ブランド化するのが大事なのではないかという話も出た。

D　食と農（地産地消の推進）農業関係

発表者：小泉寛明（進行役）

現状の課題：

- 地産地消がなぜ必要か。地産地消を行うことのメリットや意味は何なのか。それが分からないと食育教育が広がっていかない。その意味は何なんだろうと考えた。
- 世の中の不安定感から来るもの、たとえば戦争（が起こる）リスクなどを考えると、自給率を上げていかないといけない。自給率を上げることによって安全保障が保たれる部分もある。自給率をどう上げていくかという課題がある。
- 価格が安いものを買いたい消費者がいる一方、地産地消を進めると価格がどうしても高くなってしまうという問題がある。どちらをどう採っていくか。（もちろん）地産地消で価格を上げていくのも非常に大事で、その戦略でうまくいっているところもある。しかし、現状は（地産地消で価格が高いものと）、儲けられるもの〔生産単価が低く、販売価格が比較的安いもの〕と両輪でやっていくしかないのが現状、という話もあった。

- 直売所は顔の見える関係で、人に直接販売することで米農家として生きて来られたという話があった。直売所という（売り手の）農家が価格を設定できる存在の貴重さと、貴重な場所ではあるがそこでも価格競争となってしまって価格を高く設定できないという問題が出てきており、直売所をどう考えていくかは課題。
- 農業者が今後、5年でかなり減少するという問題がある。現時点で平均年齢は 68 歳。今後、農家を増やしていくにはどうしていくのか。
- 民泊やゲストハウスが（新たに農業をしようとする人の）農村に来る入口となって、（最終的に）移住してくれるのが一番良いが、移住するまでの間に（移住希望者と）コミュニケーションを取る（地域での）存在が希薄。

課題解決に向けて：

- （食料自給率の問題について、）昨日も国会答弁で「農業の時給は 10 円なんですよ」という話があったが、農業を守っていくことが日本の国においても大事ということをちゃんと教育していかなければならない。フードマイレージ※の問題もあり、（食料自給・地産地消の重要性は、）伝えていく必要がある。
- （農家が今後減少していく中で）農家を増やすためにできることは、色んな形の農業との関わり方を認めていかざるを得ないのではないか。たとえば兵庫県で就農しようとすると、しっかり事業計画があり、投資して、（本格的に）しっかりやっていく農家というのが一つの（理想）像としてあるが、もう少しこだわって作物をつくるようなスモールファーマー、自給自足型のファーマーをちゃんと認めて、（そちら側で農業に携わろうとする人の）入口もつくってあげることが必要。
- （農村への移住を考えている人に対して）とりあえず農業をやってもらえばいいという状態ではあるかもしれないが、もう少しそこに行政ではない、間を取り持つ存在がきっちりあると良い。（移住に向けて取り組んでいくと）様々な問題、土地や（農作物の）価格のミスマッチやお試し住宅（の供給）など色んな問題も出てくる。そういった経験から、都会に住みながら援農※に回る人もいれば、就農に突き進んでいく人もいれば、スモールファーマーになったりする人も出てくると思う。そこで、（移住するまでの）一年を過ごすために（支援する）中間的な存在があると良いのではないかということも議論にあがった。

※フードマイレージ：食料の輸送量（t）と輸送距離（km）を掛け合わせた指標で、食料の輸送が地球環境に与える負荷を数値化したもの。日本のフードマイレージは諸外国と比べ大きいとされる。

※援農：農業ボランティア。消費者による生産状況の理解と農業の体験、労働力不足の補充などのために消費者が農作業を手伝うこと。

E　食と農（地産地消の推進）林業関係

発表者：足立龍男（進行役）

現状の課題：

- 林業という分野において、山の災害リスクや課題といったものが一般の人にほとんど伝わっていないのが現状。どのように情報発信、PR していくか。

- 例えば兵庫県でログハウスを建てたいときに兵庫県の木では建てられないという話。また里山から出た雑木〔ぞうき：きのこの材料になる木材〕があるが、それが一旦（売られて）四国に行って、また兵庫県のきのこ農家が買っていることがあるかも知れない、という話があった。木材に関する情報が全く出ていない。木材を主体とした（サプライチェーンの）「見える化」が必要。

課題解決に向けて：

- 山といえばネガティブな情報が多い。今は、花粉症真っ只中という季節だが、森林政策が全然進んでいないという情報や、山というとスギやヒノキ自体から直接花粉が出ているだとか、木材自体にそういったことはないが、そういった間違った情報が出回ることが多い。我々〔ひょうご躍動フォーラム参加者〕の方でも情報発信をしていこうと小学校の廃校を利用して木のテーマパークなどをしたり、カフェをしながら、山のことや木のことを情報発信したりしようとしているが、県の方でも PR や情報発信に協力をお願いしたい。一緒に協力してやっていきたい。
- 県の中でぐるぐる回すことが地産地消につながるので、やはり（木材のサプライチェーンの）「見える化」が重要という話となった。（山・木材のことに関する）ポータルサイトを県の方で作っていただき、県内で木材の地産地消ができるような状況を望む。
- 里山整理などではボランティアの方に協力してもらうことが多いが、ボランティアでは持続性がないので、ボランティアからどうビジネスに展開していくかについてもサポートいただきたい。

F　芸術文化（芸術に触れる機会の創出と担い手育成）

発表者：大原智（進行役）

現状の課題：

- 「芸術に触れる機会の創出」と「担い手育成」と分けて議論しようと思ったが、担い手育成するにはそもそも、芸術に触れる機会がないと難しいという話があった。結局は、どう芸術文化に「触れてもらえるか」、「知ってもらうか」という点に焦点が絞られた。
- 「芸術に触れる機会」、文化に触れる機会というのも、そのグラデーションがある。最初に、「知る」というのがあって、次に陶芸教室や体験教室のようなもので「触れる（体験する）」というのがあって、「自分の作品やコアな表現が誰かの手に届く」というのがグラデーションの最終なのかなと思う。一番、最初の「知る」というところの人をどう増やしていくかということが課題。

課題解決に向けて：

- 一つの案として、県内の表現者同士で交流や共創をしていくことで、それぞれの表現者のフィールドやファン、ノウハウをクロスさせ、新たに知ってもらう機会の創出を図る。バンドで例えると、親和性のあるアーティスト A と B が「対バン」し、それぞれのお客さんを共有することで、徐々にお客さんを増やしていくという方法がある。それに近い話。県内の表現者が他の表現者が活動している場に視察や研修に行ったり、コラボ製品やコラボ表現を促進したりしていくような行政支援があれば良い。
- 「日常にアートを」ということを考えたときに、現在、伊丹市の芸術文化計画策定に少し携わっているが、そもそも芸術文化の解釈や価値観の幅を広げる必要があると考えている。絵を描くことやモノを作ることや舞台に立つことだけが芸術文化だけではなく、それぞれの日々の営みの中

にある一人ひとりの考えや行動、表現なども芸術文化である、全員が芸術文化の表現者（であるという芸術文化）の民主化、といった視点もあればいいと思う。

G　スポーツ（スポーツを身近に感じる環境づくり・地域づくり）

発表者：塚本洋平（進行役）

現状の課題：

- 都市部でも地方部でもスポーツが身近でない。例えば、都市部ではスポーツを気軽に楽しめる場所がない。地方部では場所はあるが、スポーツを教える人がいない。
- 都市部で、場所がないのはなぜか。地域でスポーツできる場所・環境として学校施設（体育館や運動場）が挙げられる。スポーツクラブ 21 など施設を使用できる権利を持った団体が既にいて、気軽にスポーツを楽しみたいと思っても、学校の施設を使いたいと思っても、地域の方にとっては（その制度が）参入の障壁となって、気軽に使えなくなっているケースがある。権利を持っている団体は頻繁に入れ替えが行われているわけでもなく、10 年前からずっと権利を持ったままになっている（ことも多い）。（このようなことから、）新しい活動をする余白がなかったり、若い世代が参入していくような新陳代謝がなかなか起こりにくかったりするシステムで回っているのが課題の原因ではないかという意見が出た。
- 都市部でも地方部でも共通しているのは、送迎の問題。都市部でも、共働き家庭では子どもたちをスポーツできる場所まで連れていくような時間や余力がない。地方部では（活動場所まで）距離がそもそも遠いという問題がある。

課題解決に向けて：

- （まずは施設利用についての）制度を、リメイクしていく必要がある。十数年前は地域の中心として主力として関わっていた人たちも 10 年、20 年も経つと、馬力や世代間の差ができてしまうので、新しく活動したい人たちが参入しやすい、入れ替わりが起こりやすいシステムづくり、もしくはそういったことを担う団体を選定し直すとか、リセットが起こることがあっても良いのではないか。
- （地方部の教える人がいない問題や送迎の問題について）子どもたちが集まっているところ（学校や幼稚園など）に教えに行けるような団体をもっと増やしていけたらいい。
- 子どもたちにスポーツを教えている人間が何に一番困っているかというと最初の扉を開けること。子どもたちが帰った後の幼稚園のホールや会社の屋上や駐車場などいくらでも街中には子どもたちがスポーツに使えそうなスペースであふれている。しかし、企業や学校法人、福祉法人といった団体に我々が飛び込んでいっても相手にされないことがたくさんある。実際に子どもたちがいるところに出向いていけるような段階の中で、有用な活動を行っている団体、信頼できる実績のある団体を、（門戸を開くという意味で）行政が後押ししてくれたら、（団体は）後は子どものところまで出向いて行って、子どもたちにスポーツをする機会・環境を提供できると思っている。
- そのためにも我々のような（子どもたち向けの活動を）生業にしている人間が、まず門戸を開き、しっかりと活動を行っていく。兵庫県はプロスポーツが盛んなので、そういった人たちが今度は開いた扉から参入してくれるような流れができると思う。それがプロスポーツ選手のセカンドキャ

リア、全く違う職業（に就く）より人生をかけて培ってきたスポーツをセカンドキャリアの生業にできるようなきっかけづくりにもなると思う。

H　万博・地域づくり（ひょうごフィールドパビリオンを通じた地域の活性化策①）

発表者：玉木新雌（進行役）

現状の課題：

- 兵庫県では 185 件（令和6年2月末時点）のひょうごフィールドパビリオンプログラムがあるが、兵庫県が大きすぎて繋がっていない。（フィールドパビリオンプレイヤー同士、）誰が誰か分からない。（お互いのフィールドパビリオンも）見たことがないのが現実。あと1年掛けて何ができるかが課題。
- 皆、中小企業の小さな会社の中で毎日奮闘しているので、なかなか時間がない。いろいろ見て歩きたいけど時間がない。

課題解決に向けて：

- まずは（各プログラムのことを）知ってもらわなければならない。県にしてもらいたいことはいろいろあると思う。まずは知ってもらうために、万博の入口で、「見て」「知って」と、兵庫県にはこんなに素敵なところがあるんだと、しっかりちゃんと発信をしてもらいたい。
- しかし、県頼みでもダメ。今回のような良い機会があり、目の前の人たちと知り合えた。自分たちでできることは、この機会を大切に何かしませんか、というところから始めませんかと。宿だったり、モノをつくる人だったり、すごくいろんな人が、こういった場でせっかく出会えたのだから、この場を最大限に活かし、「私のところ来たから次、お隣さんへ」という風に（お互いが）口コミで広げていく。これが大事ではないかと。
- （時間が限られている点は、）そこは県とか市とか商工会議所などいろいろな良い組織があるので、そちらでうまく出会いやマッチングをして、（相性が）合いそうなところ、こことここをお見合いしたら絶対いいことありそうだな、上手く行きそうだなというところは率先してマッチングをお願いしたい。我々もまた県からの仕事だ、嫌だなとか言わずに前向きに協力する。この機会を大切にしようという話となった。
- （先ほどの意見発表にもあった）アートや教育につながる部分もあると思うが、フィールドパビリオンは訪日外国人だけに向けてやるものでなく、子どもたちや学生、大人同士もつながるための企画だと思うので、ぜひこのような場でつながっていければと思う。前向きに取り組み、教育も絡めながら、（あるいは）若者が兵庫県に帰ってくることも促しながら（取り組めば）、地元の中小企業も元気になっていくのではないかと思う。

I　万博・地域づくり（ひょうごフィールドパビリオンを通じた地域の活性化策②）

発表者：足立哲宏（進行役）

現状の課題：

- フィールドパビリオンの対象は誰か。インバウンドなのか国内なのか。県から聞いた情報によると、2,500 万人ほどの来場者は日本人、350 万人ほどの来場者は外国人とのこと。万博に来る

多くの方は日本人が多いということ。地域にインバウンドの方が来るかと言われたら、うちの地域来る可能性ないよという話になったりして、フィールドパビリオンは、誰を対象にするか、どんなことをするのかもまだあまり固まっておらず手探り状態。

- 私もここに来るまでに（ひょうごフィールドパビリオンについて）自分なりに勉強したつもりであったが、まだあまり（情報が）出てきていない。行政に不満を言うわけではないが、どういった発信をしてくれるのか、しかし、お金は出てこない。自分たちでやろうと思えばそんなに大きな企業ばかりでなく、多くは個人だったり、小さな集まりだったりと、限られた（資源の）中で情報発信していくことになる。例えば、外国語に翻訳しようとすれば費用がかかる、何カ国語を翻訳するのか、1 年間しかない中で分散しながらどうするのか、（この取組で）何か残るのかなどネガティブな話も出てきた。

課題解決に向けて：

- せっかくこういう機会があるのだから、皆がチャンスと思って、地域づくりや（地域の）発展を考えたときに、色んな考えを聞きながら、情報交換しながらしていきたい。
- 185 件（令和6年2月末時点）のひょうごフィールドパビリオンプログラム、今ここには 20 プログラム程度の団体がおられるが、それぞれの地域の情報をもっと共有しながら、抱えている問題や課題に向けてチームで取り組んでいくことができないかといった話も出てきた。
- 地域によってはハイシーズンやオフシーズンなどシーズンがあったりするが、それが1年間各地でフィールドパビリオンをしていくと、良さが出てきたりする。
- たくさんの人が来てほしいところもあれば、やはり、そんなに人が来ても対応ができないので興味がある方に来てもらいたいとか、それぞれの地域（のフィールドパビリオン）で情報発信の仕方は違ってくる。何でもかんでも人が来ればいいものでもなくて、じっくりと知ってもらえるよう情報発信することが必要。
- これからスタートという時期。時間はあっという間に過ぎていくので、今回をきっかけに兵庫県をもっともっとPR できるか。兵庫県には魅力のある産地や色々な取組があるので、参加者で情報共有しながら、口コミなどを増やしていきながら、進めていきたい。最終的に（万博開催で）フィールドパビリオンを終えることが目的でなく、これを1つのきっかけとして、これが終わってもどう発展させていくか、今後5年10年続けていく中で、ひょうごフィールドパビリオンがあったからこそ、こうなったんだという最終的に目標がその先にあるということで、地域を盛り上げるために頑張っていきたい。

J　万博・地域づくり（住民参加や団体連携による賑わいづくり・魅力発信）

発表者：東朋子（進行役）

現状の課題：

- 賑わいづくりといっても（その課題や対処方法は、）地域により大きな差がある。
- 淡路地域では空き家が市場に流通しない、手放したくないという人がたくさんいる。来たいな（移住したいな）という人はいるが、空き家がなかなか流通していない。
- 神戸地域ではたくさん人がいるはずなのに、商店街を運営する担い手が不足している。
- 北播磨地域では移住相談を受けている参加者からは「まるで移住相談は人生相談だ」という名

言もあった。また、いつも「地域活性化」と言われるが、一体それは何でしょう、という前提に対する疑問の声も上がった。企業に勤める人からは「若者の流出が止まらない。仕事はあるのになかなか若い人が集まってこない。」という話もあった。

課題解決に向けて：

- 「人口減少はそもそも問題ではない。少なくなるなら少なくなる中でできることをどんなことをしていけばいいのか」ということを考える必要がある。何よりもダメなのは、人が少なくなっていく中での「諦めの空気感」が良くない。
- 人について焦点を当てて話し合ってきたが、“まちの未来をつくる人”を育てていけばいいのではないかという意見が出た。人が少なくなっていく社会の中で、きれいな 10 年後、20 年後の話題が出てくるが、現実をもっと強く知ってもらいたい。10 年後、20 年後の地域の状況をよく理解して、きちんと計画を立てて、協力・育んだ事業に対しては、（行政などの）助成や支援があれば良いという提案があった。
- 地域の小規模企業は大きな企業に（人材を）どんどん取られていってしまうので、若年者の雇用の PR をもっとカッコ良くしていければ良いなというのがアイデアとして出てきた。
- 終始、人が少なくなる社会とどう向き合うかということが議論の中心となってきたが、人が少なくなる状況を「諦めない」ことが最も大切なことということで最後に話がまとまった。

３　知事総括コメント

- 各グループのお話、意見発表を興味深く聞かせていただいた。
- 今日集まっていただいている皆さんは、広い兵庫県の各地で地域を代表する、第一線級の方々ばかりで、それぞれ「個」として色々な取組をされている。そういった方々が本日ここに集まっていただいたこと自体が、県としての1つの成果だったかと思う。
- 県は色々な施策をやっていくが、大事なのは各グループの意見でも共通していたのは、コラボレーションやマッチングなど色々な人が出会う機会を作らせていただくことは、県の非常に大事な役割だと思っている。
- 本日の機会などを通じて、違うフィールドの人々が出会うことによって、何か違うものが生まれてくるかもしれない。こういった機会を皆さまと共に持たせていただいたことにお礼申し上げる。